

「倜儻不羈なる大学」とは？

佐藤 郁 哉

奨励者紹介[さとう・いくや]

同志社大学商学部教授

[研究テーマ]組織の社会学的分析・社会調査方法論

「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。」

(ヨハネによる福音書 3章 16 節)

最初にチャペル・アワーのご依頼をいただいたのは去年の2月末のことでした。その時は6月30日の予定で、テーマも「大人は皆ウソつき?:健全な懐疑心を持つ」というものでした。

これは、いわゆる「エピメニデスのパラドックス」をもじったものです。つまり、自分自身がクレタ人であるエピメニデスが「クレタ人は皆ウソつきである」と言ったということです。ですので、かなり歳のいった大人である私が「大人は皆ウソしか言わない」と言ったら、さて、その発言自体の真偽やいかに、ということから話を始めようと思っていました。

その去年の予定は、コロナ禍のために中止になり、今回改めてお話しさせていただくことになり、テーマも少し変わりました。今回のテーマは、前回の予定と違って、新型コロナウイルス感染症をめぐるさまざまな問題とも関連しています。

もっとも、昨年の予定と今回のテーマの根底には、基本的に2つの同じメッセージがあります。

1つは「大人」である人たちに向けたものであり、「もう『大人の事情』を忖度して、『大人の都合』を子供たちに押しつけて子供たちの未来を奪うような、『大人の対応』は止めにしよう」というものです。

2つ目は、まだ大人ではない人たち(学生の皆さんも含まれます)に向けたメッセージであり、「大人のウソや誤魔化しがどこにあるのか、きちんと見分けられるような健全な懐疑心と判断力を身につけよう。また、自分自身が物分かりのよすぎる大人になってしまわないように気をつけよう」というものです。

「倜儻不羈」という言葉

新島先生が私たちに戒めとして遺してくださった「倜儻不羈」という言葉には、まさに、そのような健全な懐疑心と判断力、実行力を兼ね備えた人材の姿が4文字に凝縮されていると思います。

この言葉自体は、本学に関連する文書や発言ではよく見られますし、私などよりも皆さんの方がよくご存知だと思われます。

植木学長も就任直後のあるインタビュー記事でこの言葉を使われましたし、つい最近も、『同志社タイムズ』の新年号に掲載された、八田総長・理事長の年頭所感にはこの言葉が最後の方に引用されていました。

それぞれ、原典とは意味や字句という点で若干の違いがあるようですが、決して誤記や単純な間違い

ではないでしょう。実際、京都という街それ自体がまさしくそうだと思うのですが、伝統というのは常に大胆な誤読や誤解も含めて新しく創造されていくことによってこそ、伝統としての強さと生命力をもっていくものだと思います。

また、八田先生と植木先生は、まさに本法人および本学において、そのような伝統の再生と再創造にご尽力されてこられたお二方だと、私は理解しております。実際、言葉だけを一字一句違えずにお経のように唱えるのではなく、その本来の意味内容をその時々状況にあわせて再創造していくことによって、建学の精神もまた新たな命を獲得していくものだと思います。

「幻滅大学」とは

少し本題からズレてしまいました。私自身のひどい誤読と誤解があるかもしれませんが、この新島先生の遺してくださった言葉から読み取った内容について、残りの時間で簡単にお話しさせていただきたいと思います。

テーマに「大学」とあるように、今回お話ししたかったのは、同志社大学を含む日本の大学のあり方について、新島先生が後世のために遺していかれた「倜儻不羈」という言葉に込められた意味を私たちが理解し、また今日的な状況の中に生かしていく道、という問題についてです。

本学の出身でもなく、また2年ほど大学の評議員をつとめた以外は特に大学で責任ある立場に立ったこともない私が、こんな内容についてお話しするのは僭越の極みだということは重々承知しております。

ただ私は、この10年ほどのあいだ、大学問題一般、特に日本における過去30年あまりの「大学改革」の失敗について、イギリスでの半年あまりに及ぶフィールドワークも含めて、調査を行ってきました。また、その結果をいろいろなところに発表してきました。その一部は、2019年に『大学改革の迷走』（ちくま新書）という本に書かせていただきました。また2018年には、共著で『50年目の「大学解体」20年後の大学再生 高等教育政策をめぐる知の貧困を越えて』（京都大学学術出版会）という本を出しました。最近では、47ニュースというインターネット系のサイト(<http://www.47news.jp>)に「コロナで見えた『優良大学と幻滅大学』」という主旨のエッセイが掲載されました（もしかしたら、その記事を目にされた方がいらっしゃるかもしれません）。

このエッセイでは、コロナ対応、特に学生への支援に関して「できることからすぐに始めた大学とできない理由を探し続けた大学」には、どのようなところがあるか、また、その背景にはどのような事情があるか、という点について私なりの考えを述べさせていただいたつもりです。

真の大学改革に向けて

倜儻不羈の精神を生かしていくために

もっとも、今回お話しさせていただくのは、各論的な「コロナ対応」ではありません。むしろ、大学によるコロナ対応の違いの背景にある、それぞれの大学の基本的なあり方、そしてまた、さらにその背景にある、過去30年間のいわゆる「大学改革」が日本の高等教育に対してもたらしてきた、負の影響という点です。

また、そのマイナスの影響を乗り越えて、本学を含む日本の大学を再生していくためには、「倜儻不羈な

る大学」という考え方が一つの、非常に重要な手がかりになるのではないかと考えているのです。

先ほどあげた 47 ニュースのエッセイの中でも強調した点ですが、私は、本当の意味で僱不羈なる人材を育成していくことこそが、本学だけでなく、日本の大学がこれから真剣になって考えて実行していかなければならない重要なポイントだと思っています。

つまり、通念やありきたりの常識にとられることなく、本当の意味で自分自身の頭で考えることができ、また、決めたことを果敢に実行に移すことができる人材です。

そして、ここで改めて確認しておきたいことが 1 点あります。それは、そのような僱不羈なる人材をサポートできるのは「僱不羈なる教員」であり、また「僱不羈なる大学」だということです。

大学改革の失敗

非常に残念なことなのですが、その点に関して言えば、過去 30 年にわたる大学改革は完全なる失敗であったと言わざるを得ません。

実際、日本の大学は、政府や文部省・文部科学省による主導で行われてきた、上からの改革に対して、過剰な忖度と斟酌としか言いようがない対応を続けてきたのでした。当然ですが、それは、僱不羈どころかそれとは正反対の「右顧左眄(うこさべん)」とも言える対応ですね。そのような、ひたすら文部科学省の顔色をうかがっているような大学が、僱不羈なる人材を育成できるはずもありません。

その証拠は至る所に見られます。たとえば、どの大学のHPを見ても書いてある、ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、アドミッション・ポリシーです。つまり、学位授与方針、教育課程編成方針、入学者受け入れ方針ですね。

皆さんのお知り合いに大学教員がいたら、一度何人かに聞いてみてください。その内の何人が、きちんと自分の大学や学部の3つのポリシーについて何も見ずに言えるかどうか試してみてください。まあ、9割方言えません。

その理由は明らかです。自分たち自身が本当に大学教育を変えよう、より良くしようと思って、明確な方針、つまり確固たる「ポリシー」を作ろうと思って作っているわけではないからです。文部科学省、つまり「お上」に作れと言われたから、担当になった委員が中心になって作ったからなのです。だから、付け焼き刃で身につかないし、そもそも覚えられない。覚えようとも思っていないのです。

さらに悪いことには、文部科学省というか中央教育審議会は、同じような「スクール・ポリシー」というのを高校にまで作らせようとしています。

私の両親はそれぞれ小学校と高校の教師でしたし、姉も校長までつとめた小学校と中学校の教師でした。ですので、小中高の教育の現場がどれだけ忙しくて大変な仕事に取り組んでいるかは、身近なところで知っているつもりです。

しかも、その超多忙な現場が、今やコロナで振り回されているのです。その時期に、カタカナ言葉でスクール・ミッションとか、何とかポリシーとか、すごく悠長というか、何ともまあ、KYというか。まあ、大学改革についてもGY=現場読めない人たちが立案しているとしたか思えないことが多いのですが。

カタカナ言葉の氾濫

そのGYの人たちが提案し、また、(本学を含む)大学側が付け焼き刃的な対応をせざるを得なかった改革を象徴しているのが、大学改革をめぐって飛び交ってきた、大量のカタカナ言葉です。先ほどあげた何とかポリシーというのは、氷山の一角でしかないのです。

ほんの数例だけ挙げてみます。

FD(ファカルティ・ディベロップメント)、FDer(ファカルティ・ディベロッパ)、GCOE(グローバル・センター・オブ・エクセレンス)、ガバナンス・マネジメント、GPA(グレード・ポイント・アベレージ)、PDCA(プラン・ドゥ・チェック・アクション)、ループリック、ナンバリング、KPI(キー・パフォーマンス・インディケータ)、GP(グッド・プラクティス)、AL(アクティブ・ラーニング)、URA(ユニバーシティ・リサーチ・アドミニストレーター)、DP・CP・AP(ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、アドミッション・ポリシー)

何だか頭がクラクラしてきませんか。『ハリー・ポッター』に出てくる呪文のようにしか思えないかもしれません。たとえば、アバダ ケダブラやサルビオ ヘクシアなど。しかも皮肉なことに、これらの英語風のキャッチフレーズのかなりの部分が、実は、怪しげな和製英語なのです。

まあ、コロナ対応についても、Go to Eat, Go to Travel, ソーシャル・ディスタンスなど、ビックリするような和製英語が飛び交っていますが。

こういう時に、京都では次のように言うらしいですね―「賢こおすなあ、賢こすぎて私らついていけへんわあ」。

やり過ぎのだけが「大人の対応」?

それはともあれ、非常に情けないことなのですが、大学の世界では、たとえこういう不思議な呪文のような言葉に疑問を感じたとしても(あるいは「賢こすぎるなあ」と思ったとしてもそれは隠して)分かったフリをしてやり過ぎるのが「大人の知恵」であり「大人の対応」だと思われるのです。

ですので、私のように、「んな、アホな」と思って言ったり書いたりすると、「大人げない」対応だと言われてしまうのです。

さて、ここからは皆さんご自身に考えていただきたいのですが、こういう忖度あふれる対応を続けていたとして、「個儻不羈なる書生」の成長をサポートすることができるでしょうか。

この点で興味深いのは、(本学も含めて)多くの大学では、先に挙げた3つのポリシーを、文部科学省・中央教育審議会の言う「学力の3要素」、つまり知識・技能、思考力・判断力・表現力、主体性・多様性・協働性に準拠して「作文」しているということです。しかし、本来、学力の3要素というのはせいぜい高大接続までの内容だったはずで、それを大学院まで含めて準拠しようというのは、私などから見れば、かなり面妖な話としか思えません。

ですので、せめて本学は、そういう「右へならえ」ではなくて、たとえば「個儻不羈力」というようなものを柱にして、今後3つのポリシーを根本的に作り直していくべきだと考えています。

危機を越えて

5年前に着任してから何度か同志社墓地を訪問する機会がありました。特に昨年4月以降は、毎月必ず新島先生の墓碑に祈りをささげるようにしています。そこで、日本の大学が新型コロナウイルス感染症の拡大によって直面している危機について思いを巡らせてきました。その、墓所への行き帰りで改めて考えてみたことの一つを述べて、この話のしめくりとさせていただきたいと思います。

同志社自体はあと4年で創立150周年を迎えますが、本学がキリスト教系の私学として初めて大学令によって大学として認可を受けたのは1920年のことでした。つまり、今から101年前のことであり、その時日本はスペイン風邪の第3波に見舞われていました。

本学はその危機はもちろん、第二次世界大戦をはじめとする幾多の危機を乗り越えて今日にいたっているわけですが、今まさに問われているのは、コロナ後を見据えて、同志社を真の意味で倜儻不羈なる人材の成長をサポートできるような場、つまり「倜儻不羈なる大学」として鍛え上げていくことだと思えてならないのです。

〔参考文献〕

退学希望者が続出「幻滅大学」の酷すぎる実態：コロナで浮き彫りになった格差

(<https://nordot.app./678560551064159329?C=39546741839462401> ©株式会社全国新聞ネット 2020年9月18日)

2021年1月26日 今出川火曜チャペル・アワー「奨励」記録